

中部大会速報

9 愛知県 大同大学大同高校

笑いあり、涙あり

キャスト全員が協力

25日、大同大学大同高校（愛知県）が「交番へ行こう」を上演した。シリアスであるが、笑いあり、涙ありの劇だった。上演後、キャストの方にインタビューした。

脚本の決定

上演したい脚本があったものの、様々な事情により上演できなくなった。台本を探している中、「交番へ行こう」を発見した。部員全員で読み合わせをした結果、面白いという結論に至り、この台本となった。

笑いをとる工夫

劇中で笑いを生み出した背景に、言葉自体の面白さがあった。しかし、それだけではなく、セリフの間とり方やテンポに気をつけることでも笑いを生み出した。

声のハリ・出し方を変化させて笑いの場面とシリアスの場面を区別させた。

キャストの苦労

演出がキャストインテグをしたため、部員の希望とは違うキャストとなったが、そのため、キャスト自身のキャラクターを活かして演じるこ

とができた。

苦労した点は劇中の迫力を出すことだ。日下部巡査役（加藤）は、大人らしい叱り方で観客を魅了したり、自転車に乗ったりするなど、非常に迫力のある演技だった。

本番一週間前に、数名が体調を崩し、通し稽古などの練習ができず焦った。また、本番ではアドリブのシーン



下痢のシーン。

発行

第68回中部日本高等学校演劇大会生徒実行委員会 広報

2015年

12月25日

作品名

交番へ行こう



自転車に乗って走るシーン。

で上手くできた人とはできなかった人がいたため困った。加えてセリフを飛ばしてしまったキャストもいた。

劇への想い

劇中で、警察官とのやり取りを観てもらおうのではなく、人とのやり取りを見てもらい、感じてほしかった。警察官の衣装はインターネットで注文し、小道具は部員の手

でつくるなど、様々な工夫を凝らした。

舞台装置は大道具を大胆に配置し、交番らしさを出した。

編集後記

ユニークな部分と、シリアスな部分があり、この差があるからこそ、ユニークな部分は非常に楽しめるのだと感じた。

舞台装置は今までにないほどの出来であり、見ていて飽きない作りになっていた。一時間があっという間に感じた劇だった。

（担当）安永、松川、藪下、北形